

外邦図研究の7年

国土地理協会の研究助成に、故久武哲也氏らが応募した課題「アジアにおける植民地形成と地図作製事業」が2001年に採択され、本格的な外邦図研究が始まって7年を経過した。2002年には科学研究費、基盤研究(A)『外邦図』の基礎的研究：その集成および地域環境資料としての評価をめざして」による研究活動が開始され(～2004年)、『東北大学所蔵外邦図目録』(2003年)、『京都大学総合博物館収蔵外邦図目録』(2005年)を編集・刊行するとともに、関連研究者のネットワークを構築した。また、そのなかから、地理学者の戦時の活動の一端を示す重要資料が現存することがわかり、『終戦前後の参謀本部と陸地測量部：渡辺正氏所蔵資料集』を編集し、刊行することとなった(2005年)。外邦図研究はその後も国土地理協会の助成をえて継続され(2005年～現在)、2007年1月には大学では最大のコレクションである『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』を刊行した、

はじめに目標としたことは、これで何とか達成されたが、ただし、外邦図の研究は進んでいけばいくほど、さらに新しい課題がみえてくる。故久武哲也氏と今里悟之氏がアメリカ議会図書館で発見した、日本軍撮影空中写真は、この方面に大きな課題があることを示すこととなった。また、韓国や台湾では、過去の景観や地名を示す資料として外邦図が注目され、その研究が進められるとともに、リプリントが刊行されてきたことを知ることとなった。施添福氏(元台湾大学教授、現中央研究院研究員)による『臺灣堡図』(1996年)および『臺灣地形圖：日治時代二萬五千分之一』(1999年、いずれも遠流出版公司より刊行)、さらに南榮佑高麗大学教授による『舊韓末 韓半島地形圖』(図書出版成地文化社、1997年)がそれである。これによって、外邦図研究の国際化をめざすこととなった。さらに地球環境の変動を示す資料として、気象観測資料も視野にはいつてきた。

2007年4月に開始された、科学研究費基盤研究(A)「アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成」による研究は、こうした新しい課題に対応するもので、さらに大きく展開しようとしている。これによって購入した、高木菊三郎(1888-1967年、陸地測量部で外邦図の整理を担当)旧蔵の資料は、謎につつまれていた中国大陸における日本軍の秘密測量にアプローチする大きな手がかりとなることが予想される。また、アメリカ議会図書館での調査によって、日本軍の航空偵察に関連する資料のほか、日本軍将校による秘密測量の原図も発見された。

こうした研究とともに、外邦図の公開にむけたデジタルアーカイブの整備も東北大学を中心としたデータベース科研(課題名「外邦図デジタルアーカイブ」、2005年度)によって、すすめられてきた。多数の地図のスキャニングを終えるとともに、その索引図も整備され、ウェブでの公開を開始した(2005年12月)。2007年度には、再度データベース科研の採択をえて(課題名「外邦図デジタルアーカイブ」)、さらに公開する図幅数を増大させ、索引などにも改良をくわえている。

これにともなって、さまざまな技術的課題があきらかになるとともに、配慮すべき国際的課題も明確になり、2008年3月の日本地理学会では、日本学術会議地域情報分科会がオーガナイズするシンポジウム、『『地域の知』の統合に向けて：地域情報データベースの利活用』で、これらを中心に二つの報告（本号所収）をおこなうこととなった。

以上のように、研究の歩みはおかげで何とか順調ではあったが、他方、外邦図に関連する活動をおこなってこられた、以下の方々の訃報にも接することとなった。水路部で長年海図の製図を手がけられ、秘密海図にくわしい坂戸直輝氏（2004年9月）、陸地測量部で外邦図の作製にあたられた富澤章氏（2005年4月）、資源科学研究所の外邦図を整理分類され、多くの大学に配布された浅井辰郎先生（2006年11月）である。いずれの方にも、さらにお聞きしたいことが多かったが、それがかなわぬこととなってしまった。また『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』を、完成を念願されていた浅井先生にご覧に入れることができなかつたのも残念であった。さらにこの間、外邦図研究の中心として活躍してきた久武哲也氏までも病気のため逝去されることとなった（2007年7月）。

このように、外邦図研究の7年間をふりかえると、資料調査や編集作業、さらに研究会の光景がいくつも思い出され、それだけの長さをもった歳月と感じられる。またこの歳月のなかから出てきた新たな課題も視野にはいつてくる。このなかでとくに今後努力が必要と感じられるのは、上記のような研究の継続や公開の拡大とともに、研究者や社会に対して、外邦図の存在とその学術的・社会的意義について、広く知られるようにすることである。地理学や地図学をこえた領域でも外邦図を認知していただき、その利用・活用を広げていきたい。幸い2007年秋に、これまで学術誌や『外邦図研究ニューズレター』に関係者が発表してきたものをまとめて刊行することに向けて、科学研究費（研究成果公開促進費）に応募したところ、これが採択されたとの通知をいただいた。今後はその完成にも努力したい。

なお国土地理協会からは、科学研究費が採択されない時期にも助成をいただき、おかげで外邦図研究をとぎれなく推進することができた。あらためて、御礼申し上げたい。

2008年4月

小林 茂